

試験開始の指示があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

a

# 国 語

( 200点 )  
( 90分 )

## 注 意 事 項

- 1 解答用紙に、正しく記入・マークされていない場合は、採点できないことがあります。
- 2 この問題冊子は、59 ページあります。問題は5問あり、第1問、第2問は「近代以降の文章」、第3問は「実用文」、第4問は「古文」、第5問は「漢文」の問題です。  
なお、大学が指定する特定分野のみを解答する場合でも、試験時間は90分です。
- 3 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を高く挙げて監督者に知らせなさい。
- 4 解答は、解答用紙の解答欄にマークしなさい。例えば、

10
----

と表示のある問いに対して③と解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の解答欄の③にマークしなさい。

(例)

解答番号	解	答	欄
10	①	②	③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨

- 5 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけません。
- 6 不正行為について
  - ① 不正行為に対しては厳正に対処します。
  - ② 不正行為に見えるような行為が見受けられた場合は、監督者がカードを用いて注意します。
  - ③ 不正行為を行った場合は、その時点で受験を取りやめさせ退室させます。
- 7 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

## 第4問

「歌合」は、

複数の歌人を左方・右方の二組に分け、同じ題で詠んだ歌を二首一組、左右の番として比較し、両者の

優劣を競う文学的な集団競技である。鎌倉時代初期に開催された『六百番歌合』では、左右六名ずつの歌人たちが歌を競った。次の【文章Ⅰ】はその一部で、「霽」を歌題として詠んだ左方・顕昭、右方・藤原経家の歌を競わせた一番である。二人の和歌に

続いて、それぞれの相手方の和歌に対する批判と、その優劣を判断した判者、藤原俊成の判定の言葉(判詞)とが載せられている。

【文章Ⅱ】は、顕昭によって後日書かれた文章の一部で、藤原俊成の判定に対する反論が展開されている。これらを読んで、後の

問(問1～4)に答えよ。(配点 45)

問(問1～4)に答えよ。(配点 45)

【文章Ⅰ】は、顕昭によって後日書かれた文章の一部で、藤原俊成の判定に対する反論が展開されている。これらを読んで、後の問(問1～4)に答えよ。(配点 45)

【文章Ⅱ】は、顕昭によって後日書かれた文章の一部で、藤原俊成の判定に対する反論が展開されている。これらを読んで、後の問(問1～4)に答えよ。(配点 45)

問(問1～4)に答えよ。(配点 45)

問(問1～4)に答えよ。(配点 45)

### 【文章Ⅰ】

(注1) 左持

(注3) 宇津の山夕越え来れば霽降り袖ほしかねつ哀この旅

右

(注4) 今日も又交野の御野に霽してかわく間もなき狩衣かな

経家卿

右申していはいはく、左の歌、させる難なし。(注5)

左申していはいはく、右の歌、古めかし。

(注6) 判じてはいはく、左、「袖ほしかねつ哀れこの旅」などいへる、寂びては聞こえ侍るを、「宇津の山」こそ、(ア) 抛り所なくや侍らん。伊勢物語などに、「宇津の山辺のうつつにも」などいへる所にも、霽降りとも見えず。その故なきならば、(B) 霽降りぬべからん山も、「哀れこの旅」といはん所も多く侍らんかし。「宇津の山」、故無くては、さまで抛り所なくや侍らん。右は、「交野の御野」も、かの「濡れぬ宿貸す人しなれば」といへる歌も霽にて、はた鷹狩も今少しをかしく聞ゆ。左右共に、「宇津の山」「交

野の御野」も、いづくにてもありぬべく聞ゆ。同じ程のことと申すべし。

(『六百番歌合』冬部・霽による)

(注) 1 持——引き分け。結果的に引き分けに終わったということ。

2 顕昭・経家卿——共に平安末期から鎌倉初期にかけて活躍した歌人。

3 宇津の山——現在の静岡県静岡市宇津ノ谷と藤枝市岡部町とにまたがる山。

4 交野の御野——現在の大阪府交野市北部から枚方市にかけての丘陵地。皇室の狩猟地や貴族の別荘があり、平安時代には遊猟地として伝統的な地になっていた。

5 難——欠点。批判すべきところ。

6 判じて——左右の和歌を比較し優劣を判定して。このときの判断は藤原俊成によって下された。

7 「宇津の山辺のうつつにも」——『伊勢物語』東下りの段に見える和歌。当該箇所は【文章Ⅱ】の中に引用されている。

8 「濡れぬ宿貸す人しなれば」——「霽降る交野の御野の狩衣濡れぬ宿貸す人しなれば」(藤原長能『詞花和歌集』)

## 【文章Ⅱ】

顕昭、陳じ申していはく、霽は<sup>(注1)</sup> 処も分かず降るものなれば、何の野山海河にてもよみたらんに、<sup>(1)</sup> 憚り<sup>はばか</sup> 侍るべからず。雨雪のふり霜露のおかんに、ただ同じ事なり。ただし、<sup>(1)</sup> 旅に寄せてよまんにとりては、伊勢物語に、「駿河の国<sup>するが</sup> 宇津の山に入りて、いらんずるみちは、いとくらみ心ほそく、つた、かへでしげれり。物心ほそく、すすろなるめをみる事と思ふに、修行者にあひたり。『かかる道はいかがあります』といふをみれば、見し人なりけり。京に、その人のもとにとて、文をかきてつく。

するがなる宇津の山べのうつつにも夢にも人にあはぬなりけり」とよめり。この事のありさま、誠に面影にたちて、心ほそく物がなしければ、かの山路をとり分きて<sup>(ウ)</sup> よみて侍るなり。あづままちの山路には、<sup>(注2)</sup> 逢坂、不破の関、二村、高師、宇津山、足柄、

箱根、<sup>c</sup> これら皆よみならはせり。思ひかけぬ所の、歌にもよまぬをとりいでてよみて侍らばこそ、ききつかず、<sup>d</sup> なにのよせとも侍らめ。かの物語には宇津山といふについて、「うつつにも」とそへたり。今の歌は、かの山の心細きかたを、雲に引きよせて侍れば、この難侍るべからず。さる歌あればとて、あながちに「宇津の山辺のうつつにも」とよまば、無下の古歌になり侍りぬべし。又、雲ふれる所をたづね侍るに、<sup>(注3)</sup> 万葉に少々侍り。

雲ふり板ま風ふき寒き夜やはた野に今夜わが独りねん

雲ふる遠つ大海による浪のたとひよるともにくからなくに

雲ふる霞松原すみ吉のおとひむすめとみれど飽かぬかも

いや姫のおのれかみさび青雲のたなびく日すら雲そほふる

これらの如き歌は、はた野、遠つ大海、霞松原、いや姫にのみ雲を必ず詠むべきか、いかん。その外は何の所にも詠むとも、雲より所なしといふ難は、<sup>e</sup> ただ同じ事か。又、伊勢物語に、「宇津の山べのうつつにも」といへる所にも、雲ふるともみえずと侍る、いかん。かの物語に詠める歌枕に、花をよみ、月をもよめるにつけて、かの人、必ずしもその跡を尋ねて詠まざるや。

(顕昭『六百番陳状』(冬部)による)

(注) 1 陳じ申して——反論申し上げて。

2 逢坂、不破の関、二村、高師、宇津山、足柄、箱根——すべて東海道にある地で、古来しばしば歌に詠まれた。

3 万葉——『万葉集』。 4 遠つ大海——浜名湖の古い呼び名。

5 霞松原——現在の大阪府住之江区安立付近にあった松原。 6 おとひむすめ——住吉に住んでいた遊女。

7 いや姫——架空の地名。『万葉集』では「弥彦(山)」。本来、現在の新潟県西蒲原郡弥彦村と長岡市との境にある「弥彦山」を詠つたものが、「いや姫」として誤って引用されたもの。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

27

29

(ア) 拠り所なくや侍らん

27

- ① 根拠がなくては困りますから
- ② 根拠となつてほしいのです
- ③ 根拠がないということはありません
- ④ 根拠がないではありませんか
- ⑤ 根拠がないと聞いております

(イ) 旅に寄せてよまん

28

- ① 旅に寄せて詠んだはずのこと
- ② 旅に寄せて詠むつもりのこと
- ③ 旅に寄せて詠むべきこと
- ④ 旅に寄せて詠めること
- ⑤ 旅に寄せて詠むようなこと

(ウ) よみて侍るなり

29

- ① 詠んでいるのでございましょう
- ② 詠んでいるのでございます
- ③ 詠んでいるに過ぎません
- ④ 詠んでおられるはずで
- ⑤ 詠んでおられるご様子です

問2 波線部 a ～ e について、語句と表現に関する説明として最も適当なものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は

30。

- ① a 「聞こえ侍るを」は「を」が間投助詞で、語り手である俊成から、聞き手への同意を求めた表現になっている。
- ② b 「雲降りぬべからん山」は「ぬ」が強意の助動詞で、これが「降るだろう」という推量の確実性を強めている。
- ③ c 「これら皆よみならはせり」は「り」が尊敬の助動詞で、書き手顕昭から読み手への敬意がこめられている。
- ④ d 「なにのよせとも侍らめ」は「め」が推量の助動詞の已然形いぜんぎで、顕昭のためらう気持ちが強くと表れている。
- ⑤ e 「ただ同じ事か」は「ただ」と「か」が呼応して自作の歌への批判に対する、顕昭の不快感を表している。

問3 【文章Ⅰ】の内容についての説明として適当でないものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は

31。

- ① 顕昭の歌は『伊勢物語』を背景にしているせいで古めかしくなっている点が欠点だと指摘されている。
- ② 俊成は、経家の歌における「交野」と「狩衣」の語は「雲」に合っていないのではないかと指摘している。
- ③ 顕昭の歌は、山路を歩きながら雲に降られ、袖が乾かないというところには風情があると指摘されている。
- ④ 俊成は顕昭の歌も経家の歌もどちらも似たような欠点があり、同じ程度の出来だと評価している。
- ⑤ 俊成による判定の言葉には、左方・右方双方含めて、この判詞の読み手に対する敬意が示されている。

問 4 次に示すのは、授業で【文章Ⅰ】・【文章Ⅱ】を読んだ後の話し合いの様子である。これを読み、後の(i)～(iii)の問いに答えよ。

教師——俊成が「宇津の山」の歌について批判している「抛り所なくや侍らん」とは、どういうことでしょうか。話し合ってみましょう。

生徒A——『伊勢物語』に「宇津の山辺のうつつにも」で始まる歌はあるけど、その歌に雲は出てこない。そのことを「故なき」と言っているね。

生徒B——「宇津の山辺」と「雲」を結びつける「故」、つまり理由がないから、「雲」の題で「宇津の山」を出す必然性がないということか。

生徒C——俊成は歌の中で、歌枕やテーマに「故」や「抛り所」がなければダメだという考えなんだね。

教師——それじゃ、この問題について顕昭はどう答えているでしょうか。

生徒A——【文章Ⅱ】の「思ひかけぬ所の、歌にもよまぬをとりいでてよみて侍らばこそ」は「かの山路をとり分きてよみて侍るなり」に対応しているのかな。

生徒B——あ、そうか。X ということを言っているんだ。

生徒C——だから、「宇津の山」を出してくる根拠がないという難は、この歌には関係がないと主張したんだ。

教師——ここで、『伊勢物語』の同じ箇所を異本で読んでみましょう。

むかし、男、すずろなる道をたどりゆくに、駿河の国、宇津の山口にいたりて、わが入らむとする道に、いと暗う細きに、つた、かへでは茂り、もの心ぼそく思ほえて、すずろなるめを見ることと思ふに、すぎゆくにさしあひたり。「かかる道にはいかでかいまする」といふを見れば、見し人なりけり。京に、その人のもとにとて、文書きてつく。

中空に立ちゐる雲のあともなく身のいたづらになりぬべきかな

とてなむつけける。かくて思ひゆくに、

駿河なるうつみの山(注)のうつつにも夢にも人にあはぬなりけり

と思ひゆきけり。

〔伊勢物語〕(小式部内侍本)・異本一〇による

(注) うつみの山——うつつの山のこと。

生徒C——顕昭も指摘していた、旅先での心情について書いているところはいつしよだ。

生徒A——でも、Y。

教師——二首出てくる和歌には同じ修辭法が使われているけど、気づいたかな。

生徒B——はい。Z。

教師——そうだね。どちらの歌も歌のメッセージは後半に明確に示されていますね。

(i) 空欄Xに入る発言として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は32。

- ① 「雲」はどこでも降るから、場所が有名かどうかはこだわらず、『伊勢物語』に書かれたことを重視して詠んだ
- ② 「雲」のイメージからはほど遠い場所を探し、誰にとっても意外な感じのする場所だからこそ詠んだ
- ③ 『伊勢物語』には「雲」自体は出てきていないが、山路の描写に「雲」が織り込まれているから詠んだ
- ④ 「雲」から連想できる所を詠もうとしたのではなく、『伊勢物語』の旅路の心細さを「雲」に重ねて詠んだ

(ii) 空欄 Y では、顕昭が引用した『伊勢物語』と小式部内侍本『伊勢物語』の違いが指摘されている。空欄 Y に入る発言として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 33。

- ① 顕昭が引用している『伊勢物語』では、京都に残してきた人に送ったとされている歌が、小式部内侍本では送られず、独りで心の中に思い浮かべたことになっているんだね
- ② 顕昭が引用している『伊勢物語』では、京都に残してきた人に送ったとされている歌が、小式部内侍本では、送られた歌をさらに補足するための歌になっているんだね
- ③ 顕昭が引用している『伊勢物語』では、京都に残してきた人から直接渡されたことになっていた歌が、小式部内侍本では知人を介して渡されたことになっているんだね
- ④ 顕昭が引用している『伊勢物語』では、京都に残してきた人から送られたとされている歌が、小式部内侍本では誰にも託されず、送られなかったことになっているんだね

(iii) 空欄 **Z** に入る発言として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は **34**。

- ① 「中空に立ちゐる雲の」の歌では「身のいたづらに」と言い、「駿河なるうつつみの山の」の歌では「夢にも」と言つて、人間の頼りなさを表現しています
- ② 「中空に立ちゐる雲の」の歌は「あともなく」「いたづらに」が縁語で、「駿河なるうつつみの山の」の歌は「うつつ」「うつつ」が縁語になっています
- ③ 「中空に立ちゐる雲の」の二句は「あともなく」の序詞じょごで、同様に「駿河なるうつつみの山の」の二句も「うつつにも」を引き出す序詞になっています
- ④ 「中空に立ちゐる雲の」は「あと」が「後(過去)」と「跡(形見)」の、「駿河なるうつつみの山の」は「うつつみ」が「宇津」と「埋み」の掛詞かけことばになっています